

落語、竹内昭夫教授、そして講義。

外国語は新しい世界の扉を開く鍵のようなものだ。外国語が開いてくれた新しい世界は、ややもすると単調な生活を豊かにしてくれる。まだまだ自慢できるレベルではないが、若い頃に学んだ日本語は一生役に立った。日本語がもたらした楽しみの一つが「落語」だ。落語は、江戸時代から庶民に愛されてきた日本固有の伝統芸能の一つである。一人で言葉で行うパフォーマンスという点では、アメリカ式のスタンダップコメディや、今ではほとんど姿を消した韓国の漫談に似ている。しかし、伝統衣装である「羽織」を着て、座布団の上に正座した状態で演じるという外見から違いがある。多彩な人物の話し方や身振りを滑稽に再現することはスタンダップコメディと共通するが、その模写の完成度は少なくとも数段上というべきだろう。しかし、もっと意味のある違いは、むしろその形式にあるのかもしれない。

スタンダップコメディは一つのプロットで構成されることは少なく、雑多な（そして多くの場合、互いに無関係な）噺を続けることがほとんどであるのに対し、落語は一つのストーリーを中心に構成されるのが普通である。話者である落語家は、本題に入る前に雰囲気盛り上げるために、必ず身の回りの雑談で口火を切るのが定石で、これを「枕」と呼ぶ。時には、導入部の枕が長引いたり、本題よりも笑いを誘うことも少なくない。枕で客席の雰囲気がある程度盛り上がる頃、語り手はゆっくりと羽織の襟を解き、本格的に話に入るのだが、それとともに客席は静まり返り、語り手に集中するようになる。落語のネタは実に多種多様である。いわゆる滑稽談と人情談が主流だが、それ以外にも様々なテーマが扱われる。特に江戸時代からの古典落語に比べ、第二次世界大戦後

に新たに登場した新作落語の場合は、現代の様々な社会像を反映したものが多い。どんな種類であれ、最終的な目的は、登場人物の心理や情緒を鋭く捉えて風刺し、彼の言動や身振りを赤裸々に真似ることで、日常に疲れた観客を癒し、笑いを引き出すことである。落語の妙味はラストにあり、最後は意外な反転で急に終わることが多い。このような最後のひねりを「落(おち)」と呼び、落語という名称もそこに由来している。

落語は一見自然な漫才のように見えるが、実はマクラからオチまで綿密な計画によって練り上げられたものである。落語の要諦は、全てが徹底的に計算されたものであるにもかかわらず、外見上は話者が即興で飾り気が無く洒落ているように見えることである。語り手の自然さが消えた瞬間、観客の幻想も崩れ、苦しい現実が押し寄せてくるからだ。このような高度な自然さは、長い修練の過程に耐えて初めて到達できる。その過程は、音や身振り一つ一つを身につける京劇俳優の修行に匹敵するだろう。落語の形式美、そして自然な外見の背後に存在する完璧な人工的な努力、この点で、落語はまるで手入れの行き届いた日本の庭園のように、日本人独特の美意識を示す典型的な例ではないだろうか。

私が初めて落語に触れたのがいつだったか、記憶が定かではない。おそらく1995年、一時期東京で一人暮らしをしていた頃ではないかと思う。当時は家族と離れていた時期でもあり、宿では日本語の練習という名目でいつもテレビをつけっぱなしにしていた。ドラマには興味がなく、チャンネルを回していたときに出会ったのが落語だった。折りたたみ扇子一本を持って現れた語り手が、舞台の中央に正座し、丁寧にお辞儀をしてから話を始める姿になぜか惹かれた。正直、最初から内容を全部理解できたわけではない。今でも特に古典落語は、意味を半分も理解できないまま見終えてしまう

ことがほとんどだ。七十を目前に控えたこの歳になっても、日本語の勉強に対する欲が湧き上がる瞬間でもある。

実は落語を直接観劇したのは一度しかない。7、8年前のある日、東京大学の神作裕之教授と偶然雑談をしているときに、個人的に落語に魅力を感じていると軽く言ったことがある。彼は私の言葉にぱちっと嬉しがり、ちょうど自分も落語が好きなので、一度「寄席に行ってみよう」と誘ってくれた。普段は真面目すぎな彼が落語ファンというのはちょっと意外だったのだが、なんとなく好奇心がそそられ、素直に彼に連れられて浅草の寄席に行ってみた。二、三百人は余裕で収容できる大きさのホールだったが、その日の客は二十人ほどしかいなかった。時折笑いが起こるものの、テレビで見るような賑やかな雰囲気は全くなく、ふと落語の将来が心配になった。

落語に関するわずかな知識を自慢して、このようにぐだぐだと徒話を述べたのは、ともすると日本のことを軽蔑する悪習慣を捨てきれない卑しい世相への遺憾の念に根ざしている面もあるが、より直接的には、東大商法教授だった竹内昭夫教授(1929-1996)の話をするためである。つまり、枕が長くなったのである。1970-80年代に日本の商法学界をリードした竹内教授は、私と親交の深い岩原紳作、神田秀樹教授をはじめとする錚々たる学者達の師匠でもある。私が初めて彼の存在を知ることになったのは、修士論文を準備する際に読んだクラスアクションに関する論文からだった。その論文に続いて出会ったのが、彼が英米法の田中英夫教授(1927-1992)と一緒に書いた「法の実現における私人の役割」という論文だった。この論文を読んで、さらに深い感銘を受けた。私はこの論文こそ比較法研究の模範を示す力作だと思う。しかし、私にもっと強い印象を与えたのは、ある座談会での彼の発言である。4

0年以上前のことなので記憶がかすかだが、要するに、商法研究に自分の人生を捧げられなかったことが残念だという趣旨の言葉だった。当時23歳の若さで人生をどう生きるべきか何も考えていなかった私にとっては、はたして商法という技術的な分野の研究に貴重な人生を賭けることができるのか、あまり実感が湧かなかった。

そんな竹内教授に初めて、そして最後に合ったのは、1986年、留学を終えて帰国する途中に東大を訪れた時だった。今もそうだが、私は私より2歳年上の岩原教授を学問の先輩として慕っている。東大の研究室に岩原教授を訪ねたとき、彼は私を師匠である竹内教授の研究室に案内してくれた。10年前に出版した「企業統治と法」という本の序文で紹介したように、竹内教授は病気でやせていたが、眼光は炯炯としていた。椅子に座ったとた、いきなりドイツ語で話しかけてきて、戸惑った記憶が鮮明だ。先ほどの自分の論文を読んで感動したことを話すと、満面の笑みで喜んでくれた。後にその論文が本になったのだが、巻末に添付された対談で私の話に触れているのを見ると、その言葉がかなり嬉しかったようだ。

竹内教授が東大に在籍している間、同じ商法担当には鴻教授(1924-2016)がいた。私も内情はよく知らないが、二人の仲はあまり良くなかったと言われている。竹内教授はむしろ京都大学の龍田節教授(1933~2022)と特別な親交を保っていた。両教授の師匠である鈴木竹雄教授(1905-1995)と大隅健一郎教授(1904-1998)が親しかったからかもしれない。龍田教授については後日改めて紹介する機会があればと思うが、二人は学問的に本当に多くのことを一緒に成し遂げた。二人で出版した数多くの本の中でも特に目を引くのは判例教材『会社法』である。1972年初版の序文によると、自分たちはそのような教材を出すことに合意したのが5年以上前だというから、彼らはすでに30代から伝統的な講義方式に疑問を抱いていたことが分かる。

彼らはそれぞれこの本をもとに問答式の講義を試みたというが、その後改訂版が出なくなっただけを見ると（私が持っているのは1985年に出た第2版5刷である）、やはりそれが容易ではなかったようだ。私の個人的な両教授に対する印象は似ている。文章を読むとすぐに感じるのが著者の頭脳の明晰さである。論理が単純明快であるだけでなく、人間味まで漂う口語的な短文は読む楽しさを増す。二人のもう一つの共通点は

- 私は直接経験する機会はなかったが -

両者とも性格がかたなのような一面を持つという点だ。

竹内教授は数多くの逸話を残している。最も有名なのは、良い学者になるための条件についての話である。彼は、第一は体力、第二は根性と言った後、第三の条件に至って、しかし頭が悪いと「困る」と言ったということである。竹内教授の直情的な性格を示す逸話で、師匠の鈴木教授にまつわるものがある。日本では最高裁判所の裁判官のうち一人くらいは東大や京大の退任教授に任命する慣習がある。鈴木教授が退任する頃、最高裁で裁判官の採用の動きがあったようだ。噂を聞いた竹内教授は、すぐに師匠を訪ね、裁判官は他の人でもいいから、先生は商法改正作業を主導する役割を担ってほしいという趣旨で説得したという。彼の説得が功を奏したのか、最終的に鈴木教授は最高裁判事職を諦め、代わりに大隅教授が裁判官になった。他にも多くの話を聞いたが、残念ながらほとんど忘れてしまい、伝えることができない。講義をするときは、遅刻した学生が入れないように教室のドアをロックしていたという話も聞いたような気がするが、真偽は確認が必要である。岩原教授は師匠の寵愛を受ける一方で、少なからずストレスを感じていたようで、学部時代、会社法の講義の前日はほぼ徹夜で予習をしたという話や、他人を十分に信じられない竹内教授がいつも自分に「これもお前がやれ、あれもお前がやれ」と言うので、学会の発表を引き受けすぎるようになった

という話が浮かぶ。ある時は、自分は一年に論文を6本くらいしか書けないのに、竹内教授は10本も書いていると嘆いたこともあった。一年にせい三つ程度しか書けない私は、その話を聞いて愕然とするしかなかった。

私を「寄席」に導いてくれた神作教授も竹内教授の弟子である。年齢からして、おそらくほぼ最後の弟子ではないかと思われる。落語鑑賞後の二人だけの夕食の席でも、竹内教授が話題になった。竹内教授は若い頃から昔の学者の職業病とも言える肺結核に長く悩まされ、治療のために何度か病院に長期入院もしたそうだ。古来、肺病には焦りは禁物で、例えば、大きなたらいに鮒を放し、一日中鮒を眺めながら日を過しななければならないという言い伝えがあるほどだ。商法研究のために生涯を捧げる覚悟だった竹内教授には、到底似つかわしくない生活であった。神作教授は、療養中の竹内教授に頼まれて落語テープを何度か持ってきたことがあるという。竹内教授の話では、落語が講義にも役立つということだったが、私はその点が面白かった。

落語も講義も、聞き手の興味を惹きつける話し方が命であることは共通している。講義を始めたばかりの初年兵の頃、講義は演劇に似ていると思っていた。講義をしていると、まるで舞台上立つ俳優のように、聴衆の学生の反応を直接感じることができる。学生の目を見ているだけで、彼らが知的な興味を感じているのか、退屈しているのか、内容をよく理解しているのか、混乱しているのかがすぐにわかる。どちらかによって、教室を出る足取りが元気になったり、逆に気が抜けたりする。私は幸いそのようなことはなかったが、気が抜ける日が続くと、自然に講義室に入るのが嫌になるのは仕方のないことだ。宿命的に講義をしなければならない教授として、これは本当に恐ろしいことです。演技に苦しむ俳優が幸せになれないように、講義を避けたがる教授も心の安らぎを得ることはできない。どうせ教授としての人生をあきらめるのであれば、

聴衆の興味を引く手口にも少しは気を配る必要があるだろう。竹内教授は都合よく落語からそのようなアイデアを得ることができたのだから、一石二鳥とはまさにこのような場合を指すのだろう。

先日、YouTubeで偶然「桂文枝」という有名な落語家が、ユロナの影響で大きな劇場で観客なしで公演している動画を見たことがある。一人芝居であることに変わりはないのだが、いつもと違って観客の反応もなく、嘯を繰り広げる様子が何処かぎこちなく、辛く、とても見ていられなかった。もしかしたら、オンライン講義をしなければならぬ後輩の先生方も同じような苦勞をしているのではないかとふと思った。目の前に聴衆がない状態で講義するという点で、オンライン講義は演劇ではなく、映画やテレビ出演に似ているかも知れない。時折、成功した映画俳優やテレビタレントが自分の生い育った演劇の舞台が忘れられず、久しぶりに再び舞台に立つという記事を目にすることがある。おそらく、すぐ近くで自分の身振りを息を呑んで見て、笑ったり泣いたりする観客の反応が与える快感が忘れられないからであろう。桜が満開の春になると、目を輝かせた新入生でいっぱいの教室に足を急いでいた若い時の私の姿が懐かしいです。後輩の先生方が一日も早くその楽しさを再び味わえることを祈るばかりである。(2020年4月5日)